

No. 68

2009年10月発行

新潟県支部報

マイスコープ

ウズラの観察

上越市 古川 弘

野生のウズラを観察された方は少ないと思います。私が初めて野生のウズラに出会ったのは約40年前にさかのぼります。その後、長い探鳥歴の中で出会ったのは、わずか5回と本当に探すのが困難な鳥だと思います。今回やっとの思いで写真を写せました。

図鑑などによると漂鳥または夏鳥となっていますが、今回観察しているウズラ個体以外は11月から2月までの観察でした。

このところ数年追い求めているジシギの観察地に近いこともあって、足しげく通ってい

たところ、3月22日に2羽のウズラを観察することができました。一時期、ウズラの繁殖を観察するため、草原状の場所を隈無く探してみようと思ったのですが、繁殖期での調査は、鳥たちにとっては大迷惑な事で、それを押してまでする勇気もなく、偶然の機会を待ちました。8月2日にそれでもと、草藪をかき分けて歩いてみると目の前から飛び去るウズラ1羽を観察でき、繁殖の確認はできなかったものの、住み着いていたことは確かで、早くも来シーズンの目標ができました。



草むらにいる野生のウズラ

(2009年9月8日 撮影)

加茂市水源地で繁殖したサンコウチョウ

田上町 江川 浩之

はじめに

越後の小京都「加茂市」を流れる加茂川の上流部「水源地」は緑豊かで鳥影の濃い所である。平成21年の6月下旬~7月にかけてサンコウチョウの巣作りから巣立ちまでを観察することが出来たので報告する。

巣作り

<6/28 午前・午後> 今年は例年になく「月・日・星・ホイホイホイ」の鳴き声が多く聞けると思いながら、道路脇の林をふと見ると、枯れたスギ枝からコケを採取しクチバシにくわえた早を発見した。コケをくわえては高いところへ飛んでいく行動を何回か繰り返している。♂も同様だ。「これはあやしい」と思い樹冠部分を丹念に探すと、スギ林の中にホオノキ高木があり、その枯れ枝の二股の部分に♂が体を押し当てている(図-1)。作り始めて間もない巣を発見した。高さは地上から約20mの所で、観察地点である道路脇駐車スペースからかなり遠いことと、車中から観察していることから、こちらをあまり気にしていない。♂♀入れ替わりで巣材のコケを運び、積み上げる作業をマイペースで続けている。

巣材の中には蜘蛛の糸もあり(図-2)接着剤の役目を果たしているのだろう。ウメノキゴケを持ってきて外側に貼り付ける作業も同時に行っているが、これは巣の強度に関係ない。単に飾りなのだろう。それにしてもおしゃれな鳥だ。

当地域はカイツブリ、オシドリ、カワガラス、カワセミ、ヤマセミ等の観察好適地でもある。長時間の連続観察はサンコウチョウの繁殖に悪影響があると思い、場所を変え他の野鳥も楽しみながら、サンコウチョウの観察を続けてみることにした。

その日の夕方に巣を観察すると、巣はだいぶ大きくなっていて、それにしても多くの巣材を運ぶものだ。たった1日で巣は逆三角形の様相を呈してきた。(図-3.4)

<6/30 午前・午後> 巣は完成に近づいてきた。腹を押し当て産座を広げるのに一生懸命だ。<7/3 午前・午後> 巣は完成していたが、サンコウチョウの姿が見えない。この日は観察できなかった。



図-1<6/28 7:39am> 巣の土台をこしらえる♂.



図-2<6/28 7:39am> クモの糸を貼り付ける♂.



図ー 3<6/28 7:44am> 巣作り作業中、たまにかち合う。



図ー 4< 6/28 3:17pm >産座をつくる♂、あっという間に巣の形になってきた。

抱卵

<7/6 午後> 巣の場所へ行くと、巣に乗っている♀を発見。抱卵開始である。

<7/7 午前・午後> 抱卵は♂♀交互に行っているが、♀のほうが時間は多いようだ。(図-5,6) また抱卵中に鳴くことはほとんどないが、抱卵を交代した後で鳴くことが数回あった。「後はたのむぞ、ほいほいほい」とコミュニケーションをとっているのだろう。

<7/10 午後> 抱卵を♂♀交互に行っている。右枝のウメノキゴケの飾りが増えているのは自然増殖だろうか？それとも抱卵しながら飾り付けをしたのだろうか？

<7/15 午前> この日は観察時間が短かったため♀の抱卵を確認したのみであった。なお羽づくろいのためだろうか、♀が巣を離れ5

分ほど巣が空になったことがあった。

<7/16 午後> 抱卵を交互に行う。ところが、いままでの抱卵中は微動だにしなかったが、♂♀共にキョロキョロあたりを見回すようになった。巣の中で何か変化が起きているのだろうか？

<7/20 午前・午後> 抱卵開始から 15 日目である。♂♀共に巣に乗り温める行動はするが、たまに巣の中をつつく行動もするようになった。午後になると♂は♀との交代で巣に来ても、巣のフチや枝にとまり周囲を見回すだけで巣に乗り温め行動をすることはなかった。(図-7,8)



図ー 5<7/7 6:51am> 抱卵中の♀、若い個体なのだろうかアイリングは目立たない。



図ー 6<7/7 11:00am> 抱卵中の♂。



図一 7<7/20 11:34am> 巢内をつつく♀.



図一 8<7/20 4:34pm> 巢内をつつく♂、卵が割れ始めたのだろうか？卵のかけらをくわえているようにも見えた。

育雛

<7/22 午後>♂♀が給餌を開始していた。(図-9) ♀は餌を与えつつ、ヒナを温める行動も行う。ヒナを2羽確認できた。

<7/24 午前・午後>♂♀交互に給餌、ヒナは3羽であった。サンコウチョウ♂がスギ林の中で餌を探しながらひらひら舞う姿は実に美しい。♂は給餌後、巢のフチや枝にとまり見張り行動をすることが多いが、♀はすぐに巢を離れる。♀はまだヒナを温める行動もする。<7/25 午後>♂♀が交互に給餌。♀の温め行動はもう見られない。遠くて確認しづらいが、餌はコガネムシのような小甲虫・羽虫(図-10)・蛾などを与えている。頭を上下させ口中の餌を分けて(あるいは吐き戻して)3羽のヒナにまんべんなく与えているようだ。(図

-11)

<7/26 午前・午後>♂♀交互に給餌する。巢の中が窮屈になってきたのか、ヒナが巢の中で小競り合いをしている。ヒナを確認してから5日目であるが、ようやく目が見えてきたのであろう。うぶ毛もちょっと生えてきたようだ。(図-12)

なお、給餌行動を長時間観察したにもかかわらず親鳥のフン処理行動を確認することがなかったのが不思議だ。これは親鳥が若いこと等が原因なのだろうか？



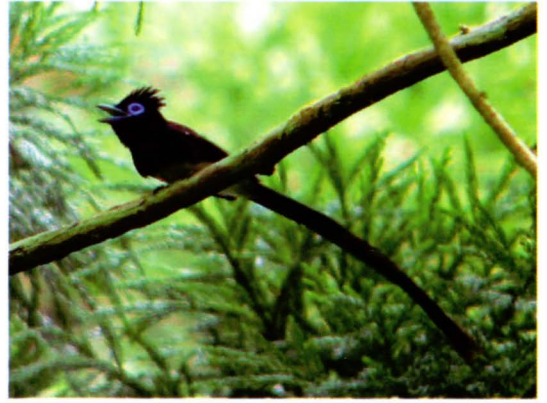
図一 9<7/22 3:47pm> 給餌する♀、光具合からコガネムシ等の小甲虫を与えていると思われる。



図一 10<7/24 00:20pm> 口いっぱい羽虫等をくわえた♂、スギ林内をひらひら舞いながら餌を取り、たまに枯れ枝で休息するので比較的観察しやすい。



図ー 11<7/25 3:08pm>3 羽のヒナに給餌する♂.



図ー 13<7/28 2:02pm>冠羽を逆立て警戒する♂.



図ー 12<7/26 2:47pm>成長いちじるしいヒナ、この2日後にはもう巣を離れるとは.

巣立ち

<7/28 午後>巣立ちが気になり、午後年休で現地に向かう。巣を見て愕然とした。空なのだ。ほんの2日前まではうぶ毛もまばらだったのにもう巣立ってしまったのか!ちょっと早すぎはしないか?もしかして捕食者にやられたのか?と心配し車から出てスギ林をのぞき込んでいると♂が近くに飛んできて冠羽を逆立て威嚇行動をする。(図-13)今回の観察中で初めて見た。これだけ警戒するのはヒナが無事な証拠であろう。車中に戻り観察を続けていると、♂♀が羽虫などをくわえ巣の下方面へ向かっている。巣から飛び降り葉陰に隠れたヒナたちに餌を与えていると思われた。

観察のまとめ

以上の観察をもとに各ステージの日数を推定すると

巣作り： 6/27-7/2(6 日間)

産卵： 7/3-7/5(3 日間)

抱卵： 7/6-7/20(15 日間)

育雛： (在巢)7/21-7/28(8 日間)

育雛： (巢外)7/29-

という結果になった。鳴き声は聞けても姿を見ることが難しいこの鳥をじっくり観察できたのはとても貴重な体験であった。

ただ、一番のメインイベントであるヒナの巣立ちの瞬間を見損ねたのは実に残念で、午前中に年休をとれば良かったと後悔した。サンコウチョウ一家は、巣立ち後もしばらくは家族群で行動すると思われるが、もう数回現地を訪れ親子5羽の姿を確認したい。

後記

8月に入ってから何回か現地へ出向いた。メジロアブの攻撃がものすごい。何10匹とまとわりつき、とても観察どころではない。梅雨時のヤマビルと共に不埒な侵入者から野鳥たちを守っているのがあった。

コムクドリの生活史を調べる～ 2 ～

新潟市 小池 重人

5. 巣づくり

生活史を調べる上で最も重要なことは、巣づくりから巣立ちまでの生活である。巣箱を使う種は、定期的に巡回していると中の様子を詳しく調べられる。調査を始めた頃は幅18cmの板で巣箱を作った。シジュウカラ用が幅14cmで、それよりも大きい鳥なのでこの大きさがちょうど良いと思ったからだ。コムクドリは雄も雌も巣材を運ぶ。巣材の材料はマツやイネ科の枯葉が主で、広葉樹は青葉なら時々入れるが枯葉はめったに入れない。そして奥の方に産卵のための産座というくぼみを作る。あらかじめその位置に産座を作るのではなく、材料を運んだあとに産座の位置に座り嘴と脚を使い材料を押しつけ産座を作っていく。産座の大きさは縦・横・深さの順に平均して8.0, 9.8, 6.4cmである。

大きな巣箱ではたくさん巣材を運び入れる。一方、数年後に底面が10×10cmの小さな巣箱も架けてみたところ、巣材は少なくなったが、それでも普通に営巣した。また、あらかじめ底の方に小さな枠を作っておくと主に下に敷くだけで横方向にあまり巣材を置かない(図1)。



図1. 小さな枠を作ったため、あまり巣材を入れなかった巣箱。右が入口の穴。

だから、大きな巣箱だとたくさん巣材を入れるのは、保温のためというより産座を作るために単に隙間を埋めているだけなのだ。ただ、小さな巣箱は雛が大きくなると雛が折り重なり数の確認がしにくいので、最近では幅14cmの板を使っている。

6. 産卵

木々が新緑に装いを変える頃、青い卵が産まれる。毎年、最初に青い卵を目にしたときが一番の楽しみである。産卵は朝で、6-10時の間に産んでしまう。そのため、午後に巣箱を調べればその日の産卵状況がわかる。卵は毎日1卵ずつ産むので、たとえば巢に3卵あった場合は2日前が初卵日である。この初卵日というのが重要で、毎年の繁殖開始時期の基準になる。コムクドリは繁殖を成功させれば一回しか繁殖しない。1978-2005年の初卵日全部の平均は5月13日で、5月上中旬が多い(図2)。失敗したものは再繁殖するものもあるが、再繁殖する頃には巣箱はすでに他のつがいにほとんど使われているので、初卵日の記録にはほとんど入らない。

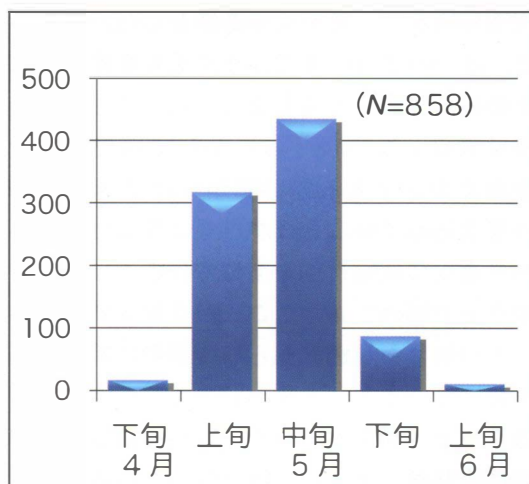


図2. 初卵日の時期的変化 (1978-2005).

一回の繁殖での卵数を一腹卵数という。卵は毎日産卵するので、もう増えなくなったらそれがその巣の一腹卵数である。時折予定した数より卵の数が多いことがある。これは他の雌が産んだもので「加卵」という。このようなとき多くの場合1卵だけ他の卵と色や大きさや形が異なっている(図3)。この行動が種内托卵なのか、単に営巣場所の不足による結果なのかははっきりしない。一腹卵数はこの卵は除いて数えておくことにしている。



図 3. コムクドリの加卵. 中央の小さな卵が加卵されたもの.

1978-2005 年の記録では一腹卵数は 3-9 卵で、全部の平均は 5.7 卵であった(図 4)。一腹卵数は初卵日が遅ければ少なくなる傾向がある。

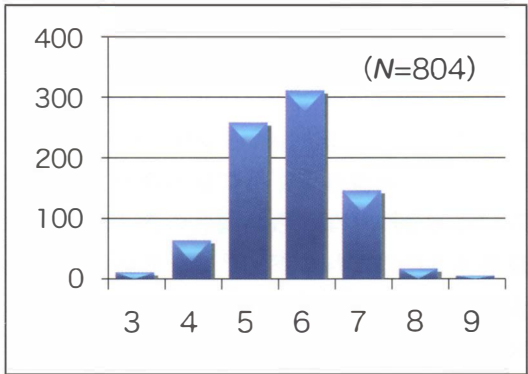


図 4. 一腹卵数の状況 (1978-2005).

7. 孵化と抱卵日数

抱卵は雄も雌も行う。しかしそれは昼間のことで夜間は必ず雌が抱卵する。最後の卵が産まれてから普通 11 日後に孵化し始める。

希に 10 日後の例もある。いったい卵はどれだけの期間温めたら孵化できるのであろうか。そこで全卵孵化した巣で、最後の雛が孵化するまでの日数を調べたら 12-13 日後であることが分かった。少なくとも 12 日間抱卵される必要がある(小池 1988, 図 5)。

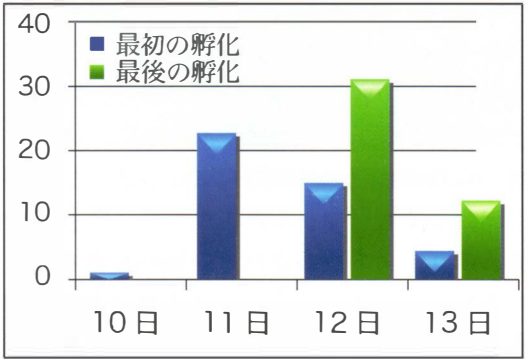


図 5. 全卵が孵化した巣での、最後の卵が産まれてから孵化するまでの日数 (1978-1988).

最初に孵化してから最後に孵化するまでの 1 日ほどのずれはどのようにして生じるのだろうか。これは産卵時期の産座の温度を調べることからおよその事が分かってくる。たとえば 4 卵産んだある巣では、2 卵目を産んだ夜と 3 卵目を産んでからは外気温よりは産座の温度が高い(図 6)。つまり最終卵を産む前日あるいはその前から抱卵を開始している可能性がある。そのため同じ巣内において孵化のずれが生じてくるようなのである。

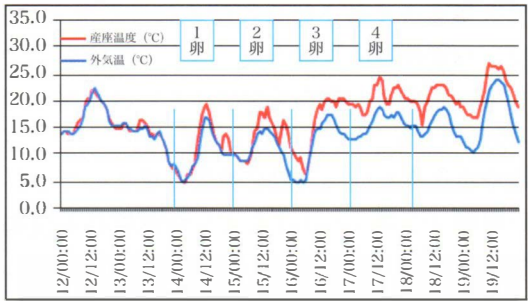


図 6. 4 卵産んだ巣での、産座の温度と外気温 (2009 年 5 月の記録).

参考文献

小池 重人 (1988) コムクドリの繁殖生態. Strix 7: 113-148.

雄キジのナワバリ防衛行動を撮る

新潟市 千葉 晃

キジが日本を代表する国鳥であることは愛鳥家ならずともよく知っている。繁殖期の雄の艶やかな外観とゆったりした歩きぶりからは威厳のようなものさえ感じられる。なるほど立派な鳥だとうなずいてしまう。しかし、身の周りのありふれた野鳥のせい、この鳥に出会っても「なーんだ、キジか！」程度で済まされ、よく観察されない傾向があることも事実であろう。私もそのような一人で、普段は格別注意も払わない。ところが、数年前の春、阿賀野川中流域の河川敷で出会った時は、つい夢中で見入ってしまい、その行動をカメラに収めずにはいられなかった。デジタルカメラを購入して間もないこともあったが、秒速5コマで撮影してみたくなる興味深い出来事も含まれていた。「なんと物好きな！」と言われることを覚悟でその時の様子を紹介する。デジタルカメラは、このような時心置きなくシャッターが切れ、フィルム代や現像までの時間などを気にせずに済む。

その1 (ナワバリ宣言、ホロ打ち)：キジの雄は原野、疎林、耕作地などに広いナワバリを構え、そこへ雌を呼び入れて繁殖する。春から夏の間、雄はナワバリ内に幾つか見張り場所を設け、そこでナワバリ宣言を意味する誇示行動、「ホロ打ち」を行う。平坦な草地や耕作地では、一般に見張り場として小高い場所（土盛りや土手など）が選ばれる。なぜなら、広く見渡せるからだ。「ホロ打ち」は、ケン・ケーンの大声の直後に行われる羽ばたきディスプレイのことで、遠くまで聞こえる大きなバタバタという音が伴う。探鳥会でもよくこの声や音を聞くが、実はその時の様子を身近でじっくり観察したことはなかった。今回は、近距離（約8m）から一部始終を撮影できた（図1の1～9）。周囲を見回した後、雄はペンギンのように直立姿勢を保ち、上方

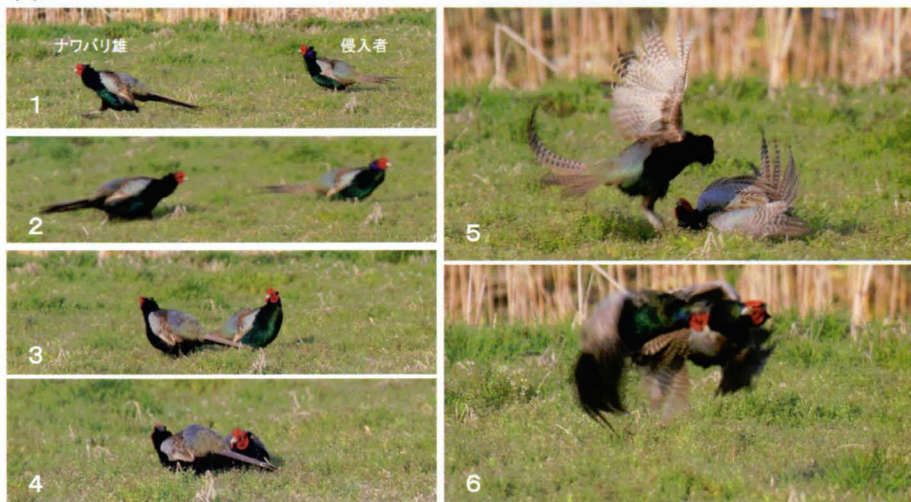
に伸び上がってケン・ケーンと二声鳴いた後、大きく後方に沈み込みながら両翼を強く打ち振る（羽ばたく）ことがわかった。鳴く時は、通常目の瞬膜が開閉し、ホロ打ちの最中から終わりにかけて、腹部の羽毛が逆立っていた。

その2 (ナワバリ防衛闘争)：隣接場所から他の雄がナワバリに接近または侵入すると、すぐさま、ナワバリ雄がこれに反応する。侵入者に対し、ナワバリ雄は背や肩を持ち上げた脅しの姿勢あるいは頭頸部を前に伸ばした姿勢で小走りに接近し、追い返そうと試みる（図2の1, 2）。侵入者がこれに応じない時はにらみ合いとなり（図2の3, 4）、互いに顔の赤色部を大きく見せ、中腰のまま伏せるような低い姿勢を保ち、触発寸前となる。その後、互いにタイミングを見てジャンプし、瞬間的に空中で蹴り合った。着地するとまたにらみ合いになり、場所を少しずつ変えながらこの行動が何度か繰り返された。ジャンプの高さはおおよそ50cm～1mであった。この闘争中、鳴き声を聞くことはなかった。

その3 (闘争中のハプニング)：前記したナワバリ防衛闘争が繰り返され、何度目かのにらみ合いになった時、ハプニングが起こった（図3の1～5）。付近で採食中のハシボソガラスが両者のすぐ傍に歩み寄り、自身も低い姿勢を取りながら、両者のにらみ合いを観察？またはこれに参加？したかのように見えた。そして、突然カラス自身が垂直にジャンプし、その着地に前後してキジの一方が同じようなジャンプを行った。まるで、千秋楽、全勝横綱同士の対決を仕切る行司のようでもあった。この瞬間から、主役はもはやキジではなく、ハシボソガラスに移ったようにさえ思われた。（君たち、もっと真面目にやれよー！）。



図A



図B



図C

新緑の銀山平探鳥会

小千谷市 黒崎 浩子

探鳥会の前日、遅れて参加したため焦りつつ銀山平に向け車を走らせていたところ、奥只見シルバーライン手前の大湯温泉から曇りが小雨になり、現地は雨となりました。そんな天候でしたが、宿に着くなり湖山荘のおいしい蕎麦や山菜料理を堪能し、研修会では桑原和寿さんが「魚沼の自然と野鳥」について動画を交えて発表され、デジスコの質問とアドバイスもあり、楽しい時間を過ごす事ができました。

当日は小雨の中傘を差して宿を出て歩き始めたら早速ニュウナイスズメの声が聞こえ、当地でのスズメは全てニュウナイスズメとのお話しも聞くことができました。

小雨が降ったりやんだりの天候でしたが、2時間ほどの行程の中で、オシドリはつがいでは何回かはばたくのが見られたり、コルリ、ツツドリなど全部で29種類の野鳥が確認できました。なかでもノジコは道中何回も姿を見せてくれ、存分に声と姿を堪能しました。

また、鳥だけでなく他の動植物にも造詣が深い方がたくさんおられて、サンショウウオの卵、アカハライモリ、シラネアオイ、サンカヨウなども野鳥以外の自然観察もありました。

探鳥会から戻り、朝食までのひとときに宿直近の温泉センター『白銀の湯』で少し冷えたからだを暖めに行き、内湯からは残雪の中の岳、駒ヶ岳が望まれ、下見で何回か足を運ばれた中山久美子さんのお話では、時間帯により内湯の脱衣所に面した窓ガラスにも山々が映し出され素晴らしいとのことでした。また露天風呂でお湯につかっていたら、煙突にニュウナイスズメが出入りしていて、本間由紀子さんと三人で露天風呂に入りながらニュウナイスズメの声と姿をたつぷりと間近で堪能でき、とてもいい時間を過ごす事ができました。

帰宅してから探鳥会のお話を片貝野鳥クラブの山村英人さんにお話ししたところ、ノ

ジコは片貝でも観察できるとのお話を伺い、銀山平で出会えたノジコを忘れないうちに自宅周辺でも会えるといいなあ楽しみも増えた探鳥会でした。



頸城平野の水田に珍鳥飛来

上越市 古川 弘 ・ 大原 淳一



↑ ツバメチドリ 2009年8月29日
(夏羽から冬羽に移行中)
発見 大原淳一
撮影 古川 弘

⇄ ツバメチドリ (夏羽)
2009年5月16日
発見・撮影 古川弘



ヨーロッパトウネン
(成長・夏羽から冬羽への移行中)
2009年8月22日
発見・撮影 古川 弘



中部ブロック会議参加報告 事務局

本年度の中部ブロック会議（中部10県20支部による地区会議）は、6月27日、28日に岐阜県白川郷のトヨタ白川郷自然学校で開催されました。参加者は54名で、新潟県支部からは石部評議員、岡田副支部長、本間の3名が出席しました。財団本部からは、佐藤副会長、大畑チーフレンジャー、山本自然保護チーフ、岡本普及チーフの4名が出席し、佐藤副会長の開催の挨拶に続き、法人制度改革に伴う財団本部の取り組みと今後の計画、バードウィーク全国一斉探鳥会及びモニタリングサイト1000の調査結果等について報告がありました。続いて、岐阜県支部小野木三郎氏から「飛騨の自然」と題して御嶽山をはじめとする岐阜県の自然と野鳥について講演がありました。二日目は早朝探鳥会から始まり、アカショウビンなど夏鳥たちの声を間近に聞くことができ、続いて自然学校レンジャーによる観察会とネイチャー



白川郷の自然と合掌造りの家々

ゲームの体験研修がありました。二日目の会議では、長野支部より「風力発電計画の対応」、福井県支部より「河川環境保全について県への要望対応」、三重県支部より「木曽岬干拓地におけるチュウヒの繁殖について」等の問題提起があり、出席者により真剣な討議が行われ、盛会のうちに終了いたしました。（本間）



発行	2009年10月30日	No.68
発行人	大島 基	編集者 小林成光、浦部良雄、千葉 晃
事務局	日本野鳥の会新潟県支部 〒950-0941 新潟市女池3丁目13番25号 TEL 025-285-2405 本間由紀子方 〈振替口座〉00610-1-6002	